

答志島の「結(ゆい)づくり」プロジェクト 都市高齢者向け「漁業版ワーキングホリデー」を開始

鳥羽磯部漁業協同組合 監事 佐藤 力生

全国初の漁業版ワーキングホリデー

おもに農業分野で行われている「農村ワーキングホリデー」(※註)という社会活動があります。すでに二〇年前から行われているもので、「都市住民が、都会から一定距離離れた農村において、農林業の作業に携わったり、農村生活に触れたりしながら余暇を過ごす仕組みのこと」と定義されています(鈴村源太郎東京農業大学教授による)。その漁業版を(調べた限りでは全国で初めて)答志島の和具浦地区のワカメ養殖で平成二八年度から本格的に行うことがで

きました。以下、このプロジェクトを始めたきっかけ、その仕組みの概要と結果、今後の展望などについて、ご紹介していきます。

※註 ワーキングホリデー…本来は、就業許可付きの海外休暇旅行(青少年に限り訪問国で働きながら旅行することを認める)制度を指すが、わが国では宮崎県西米良村で平成九年から始まった滞在型体験農業制度の名称に用いられ、現在では長野県飯田市の無償援農制度などでも使用されている。

元気な都市高齢者の漁村での活用を

私は、平成二四年三月に水産庁を定年退職後、三重県下の熊野市の漁村に

単身で移り住んでイセエビ刺し網漁船に乗船し、その後、鳥羽市の本土側にある安楽島町でカキ剥きなど沿岸漁業のお手伝いをしてきました。現在は三カ所目となる鳥羽市の離島・答志島に住み、毎日魚市場の手伝いをしています。これまで三六年間、机の上で水産行政の仕事をしてきましたが、どうして漁業者はそのような考え方をするのかなど、疑問を持つことが多々ありました。そこで退職後、とにかく漁業現場を自ら体験し、その疑問の出どころを探ってみようと思い、沿岸漁業の手伝いを始めたのでした。



ワカメの汚れ落とし作業中（手前の方が参加者）。

その結果、資源管理一つをとっても、自然というものは人間の力をはるかに超えた存在で、机上で考えたようにはいかななど、疑問に思っていたことが徐々にわかってきました。また、肝心の漁業の手伝いについては、やはり本物の漁師の仕事の間近に見ると、素人が役に立つには限界がありました。

業には、相当の経験を要する高度な仕事もある一方で、素人でもある程度の練習をすれば十分役に立つ仕事もあるのです。特に、忙しい時に簡単な仕事だけでも手伝ってもらうと、漁業者にとって大変ありがたいのです。

そこで、私のように都会で定年退職し、特に仕事につかず年金生活に入る高齢者を、男女を問わず、どうすれば漁業現場で活用できるか、その仕組みづくりを考えるようになりました。そして、漁村と都市が金銭授受を伴わず互いに助け合う仕組みを、「結（※註）づくり」とネーミングすることになりました。

※註 結（ゆい）…元来は主として農村社会における協働の慣行。田植えや屋根の葺き替え作業などを相互扶助する。原則として提供された労働は同等の労働で等価交換される。

養殖ワカメの加工体験を試験的に実施

そのような漠然とした構想を抱え、平成二七年六月に磐志島に移り住みま

した。そこで企画の話をすると、「素人でも簡単にできるワカメの加工作業が適しているのでは」というご示唆をいただき、ワカメ養殖を大規模に行っている鳥羽磯部漁協和具浦支所の運営委員長、橋本計幸さんに話を持ってきました。

その際、ワカメ漁家の中には、「旅費も自分持ち、無報酬で手伝いに来るもの好き」がいるわけがない」という意見もありました。しかし、自分自身の体験から、素人にとって生き物相手の作業は意外に楽しいこと、何より漁村での生活体験自体が魅力であり、時間に余裕のある都市部の高齢者は必ず関心を持つはず、もの好きは私だけではないという見込みがありました。

そうはいっても、漁村や漁業は一般の方になじみの薄い、ややもすると閉鎖的とも受け止められる特異性があり、本当に実現できるのかという不安も同時にありました。しかし橋本委員長に趣旨を理解いただき、その強いリーダ

ーシップのもと、「まずはやってみよう」と、ワカメ加工の試験的な体験を平成二七年度（二八年三月）に行うことになりました。

その結果、六〇歳以上の五人の方が三泊四日で参加され、水揚げされたワカメの選別やカット、茎抜きといった単純作業に従事。「漁村や漁業を初めて知った。得難い経験だった」と満足していただき、受け入れ漁家からも、「まったく経験がない方でも慣れれば十分役に立つ。ありがたい」との感想が寄せられました。

日本離島センターの助成制度を活用

これらの準備をしていた頃、鳥羽磯部漁協の永富洋一組合長から、「日本離島センターの離島人材育成基金助成事業を活用したらどうか」とのアドバイスがあり、ワカメ漁家で結成されたチームを実施主体として平成二八年度事業に応募したところ、幸いにも採択



広報用チラシ。

されました。この助成制度は非常に使い勝手が良いもので、プロジェクトの推進に大いに役立ちました。特に参加者の公募や申し込みに欠かせないホームページ（簡易検索：「ゆいといばいそべ」<http://www.yuitobaisobe.com/>）の立ち上げや、広報用チラシの作成は、この事業がなければできなかったと思います。

長野県飯田市の先駆例に学ぶ

「結（ゆい）づくり」構想を思いついた頃、すでに同様の取り組みが「ワーキングホリデー」として農業分野では全国各地で行われていることを知りました。



講演会「飯田市ワーキングホリデーの運営ノウハウや受け入れ実態を学ぶ」の様子。

調べてみると、全国でもっとも大規模に行われているのが、二〇年近い実績を有する長野県飯田市の事例（※註）であることがわかりました。

これはぜひ勉強しなければと、平成二八年六月、私自身が参加体験するとともに、運営主体である飯田市農業課の方に、仕組みやこれまでの苦労話などを教えていただけないかと依頼しま

した。その結果、制度立ち上げ時の担当者、現在の担当者、受け入れ農家の奥さんが七月末に来島してくださり、全員が女性だったこともあり、ワカメ漁家の奥さん方の参加も得て講演会を開催することができました。これは「結（ゆい）づくり」に向けての地域の関心を高めるとともに、枠組みの検討において大いに役立ちました（これらの活動にも離島人材育成基金助成事業を活用）。

※註

長野県飯田市「ワーキングホリデー飯田」…農業に関心がある方や農業に取り組んでみたい方と、農繁期の手助けを必要としている農家を結びつける《援農》制度。平成一〇年度開始。飯田市役所が仲介役となり、数日間農家と寝食を共にして、農作業を手伝う（食事と宿泊を各農家が提供）。参加者の中から新規就農につながった実績もある。

作業は無報酬、滞在費も参加者負担に

このような活動を通じて知識を得て、ワカメの収穫期も近づきつつあったことから、具体的な受け入れの枠組み（募集要項）を決める段階となりました。問

題となったのは滞在中の食事と宿泊です。飯田市では、受け入れ農家で食事と宿泊を無償で提供するシステムでした。各農家は広い敷地に大きな家、離れを持つなど余裕があるためですが、答志島は限られた土地に民家が密集し、参加者を自宅に受け入れる余地はありません。

島内の旅館や民宿を利用してもらうにしても、ワカメ漁家に宿泊費を出していただくのでは誰も受け入れてくれない。かといって、滞在費まで参加者に負担いただいては申し訳ない。どうしようかと悩んでいるときに、試験的な体験に参加された方のご意見を聞いてみると、「事情をきちんと説明しておけば、負担は気にならないのではないか」とのことでした。

その言葉に押され、参加者に滞在費も負担していただくことにしました。ただし、六泊七日の結（ゆい）コースの長期滞在者については、受け入れ漁家が費用の半分を負担することにしまし

た。また周辺の旅館や民宿には、プロジェクトの趣旨をご理解いただき、極力安価にさせていただきました。

表 1 「結（ゆい）プロジェクト」募集要項

滞在日数	・体験コース 3泊4日（実際のお手伝いは2日間） ・結（ゆい）コース 6泊7日（実際のお手伝いは5日間）
作業内容 場所	作業（1） ワカメの選別とカット作業（漁港岸壁） 作業（2） ワカメの茎の部分をそぐ作業（漁港岸壁） 作業（3） 塩漬けしたワカメの茎抜き作業（作業小屋）
申込資格	・誠意を持って漁家の手助けをしてくれる方。 ・60歳以上のワカメ加工の軽作業の手伝いができる方なら性別を問いません。
費用負担	・往復の交通費は参加者負担となります。 ・滞在中の民宿代（1泊5000円）も参加者負担となります。 ただし、結（ゆい）コース参加者はその半額負担となります。 ・作業報酬はありません。ワカメなどをお土産としてさしあげます。

「移住・定住コース」の追加

募集要項(表1)が決まり、平成二八年一二月にホームページを公開しました。その後、鳥羽市農水商工課水産係の橋本忠美係長から、移住・定住希望者向けの体験コースを設けてもらえないかという提案がありました。答志島では、漁業作業における人手不足対策



新聞記者から取材を受ける参加者(左)。

も重要ですが、それ以上に島の人口減少を食い止めるための若い人の移住・定住が大切です。そこで新たに「移住・定住コース」を設けることとし、同二九年一月にHPで公開しました。

これを機に、鳥羽市でも積極的な広報活動を行っていただき、多くの新聞社やテレビ局が取材に來られるようになりました。これは大変ありがたいことでした。HPや広報用チラシだけでは申し込みが低調で心配していたのですが、マスコミ報道を契機に急増したからです。このプロジェクトは実質的に漁協和具浦支所が運営主体となっていますが、やはり行政の影響力は大きく、連携しながら事業を進めていく必要があると思いました。

おおむね好評だった参加者の感想

結局、三月中旬から四月中旬にかけて、県内や関西、首都圏から一七人の



「移住・定住コース」の参加者と沖のワカメ養殖場見学。

方々に参加いただきました(延べ滞在期間は七二人日)。以下は、AおよびBコースの参加者一〇人のうち、九人からの回答を要約したものです。

①ワカメ作業について

「とても簡単だった」(二人)、「簡単だった」(三人)、「どちらでもない」(二人)、「難しかった」(二人)と感想が分かれました。

「簡単だった」理由は、作業そのものは難しいものでなく、手順や留意事項が少ないなどでした。

「難しかった」という回答は、(作業は

表2 参加者数と滞在期間

参加者17人 延べ滞在期間72人日

コース	参加者	年齢	住 所	滞在期間 (平成29年)
A 体験コース (3泊4日)	A1	45	兵庫県尼崎市	3月18日～3月21日
	A2	72	三重県名張市	3月25日～3月28日
	A3	64	三重県四日市市	3月25日～3月28日
	A4	70	三重県亀山市	3月25日～3月28日
	A5	68	神奈川県横浜市	3月28日～3月31日
	A6	68	三重県鈴鹿市	4月 8日～4月11日
	A7	68	大阪府池田市	4月 8日～4月11日
小 計	7人			延べ28人日
B 結(ゆい) コース (6泊7日)	B1	63	三重県松阪市	3月18日～3月24日
	B2	74	大阪府豊能町	4月 8日～4月14日
	B3	64	千葉県船橋市	4月 8日～4月14日
小 計	3人			延べ21人日
C 移住・定住 コース (2泊3日) (3泊4日)	C1	40	埼玉県鴻巣市	3月27日～3月29日
	C2	14	埼玉県鴻巣市	3月27日～3月29日
	C3	11	埼玉県鴻巣市	3月27日～3月29日
	C4	9	埼玉県鴻巣市	3月27日～3月29日
	C5	42	埼玉県さいたま市	3月27日～3月29日
	C6	22	千葉県市川市	3月28日～3月31日
	C7	17	愛知県日進市	3月28日～3月31日
小 計	7人			延べ23人日
合 計	17人			延べ72人日

(注1) 参加者のうちA6、A7、C3は女性。

(注2) 上記のほか、見学参加(1泊2日)で3人(延べ6人日)、B1が再び日帰り1日、取材の女性週刊誌記者も1日参加、これらも含めると総滞在延べ日数は80人日となる。

簡単だが隣で同じ作業をしている漁業者のスピードや正確さと比較した上でのことでした。

「素人の作業で大丈夫だろうか」という不安に対しては、「商品として適さないものは箱詰めの際にチェックして

除いてもらえると聞き、安心した」という感想もありました。

②受け入れ漁家の対応について

「とても良かった」(八人)、「良かった」(二人)でした。

理由は「丁寧に教えてもらった」「気さくに声をかけてくれた」「和やかな家庭の雰囲気の中で作業ができた」などでした。

③結(ゆい)づくり全般について

「とても良い」(一人)、「良い」(八人)でした。

(理由)

- このような仕組みがあれば体験できないことができて良かった。
- シニア向けのワカメ体験として良い経験ができた。
- 都市部の高齢者を漁村での労働力として活用する企画は素晴らしい。
- 島の日常生活に接することができた。
- いろいろな人と話ができて、新鮮だった。



作業小屋にて、参加者と受け入れ漁家との懇親会。

・自分の知らなかった漁村の生活への関心が満たされた。
・太陽の下（自然の中）での作業で、「自然に対し人間はまだまだ小さい」という感触が味わえた。

④ 指摘された課題

「期待していた沖の養殖場の見学が天

候の都合によりできなかった」「年金生活者としては滞在費が負担となる」との回答もありました。

以上のように、農業版ワーキングホリデーにおいても前例のない滞在費まで負担させる仕組みでありながら、参加者に高く評価していただいたことに感謝せざるを得ません。一方で、改善すべき点も指摘されており、今後の検討課題となりました。

都市住民に対する ボランティア活動として

ワーキングホリデーの取り組みは、先駆である飯田市の例を参考にしても、まずは継続すること、そして少しずつリピーターを増やしていくこと（高齢者を対象にしたのはそのため）が肝要であると思われます。急がず慌てず、着実に実績を積み上げ、参加者と受け入れ漁家の双方に喜ばれるような内容にして



地元の寿司屋で、参加者2人と鳥羽磯部漁協和具浦支所運営委員長の橋本計幸さん（右）。

いくことが必要です。

また今回、「移住・定住コース」の参加者の中には、将来的に島での定住を実現させたいとの想いを抱いた方もいらっしゃるかと聞いています。

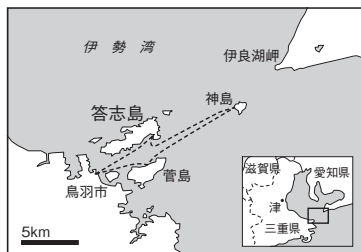
平成二九年度漁期における新たな検討課題としては、「国の補助事業の活用で、参加者の滞在経費の負担を少しでも軽減できるような方策が見いだせ



「移住・定住コース」に愛知県から参加した高校生。

とうしじま 答志島 data

鳥羽港の北東約1.4kmに位置する。面積6.98km²、周囲26.3km、人口2,132人（平成29年9月末現在）。島の東部に答志町答志、答志町和具、西部に桃取町がある。漁業従事者が約50%を占め、次いで観光業が盛ん。夏場を中心に海水浴客や釣り客などで賑わう。平成4年に和具サンシャインビーチ桃取が完成。同14年には、和具浦漁港の塩ワカメづくりが環境省の「かおり風景100選」に選ばれた。



佐藤力生（さとう りきお）

昭和26年大分県生まれ。東京水産大学（現東京海洋大学）増殖学科卒業。同51年水産庁入庁、管理課資源管理推進室長、水産経営課指導室長、漁業調整事務所長（境港、瀬戸内海）、栽培養殖課漁業資源情報分析官などを歴任。平成24年水産庁退職後、三重県熊野市、鳥羽市で沿岸漁業手伝い。現在、鳥羽磯部漁業協同組合監事。著書に「コモンの悲劇」から脱皮せよ——日本型漁業に学ぶ経済成長主義の危うさ」（北斗書房）がある。

ないか」「ワカメの葉とメカブの間の茎の部分は、地元ではいろいろな料理の食材として利用されているものの、人手不足などの理由から外部には出荷されておらず未利用となっている。参加者に手伝ってもらい、試験出荷を通じて商品化への可能性が探れないか」などを考えているところです。

今回の取り組みを通じて、新たな発見もありました。それは、都市農村交流研究の第一人者、東京農業大学の鈴木源太郎教授が平成二九年八月に来島され、「ワーキングホリデーは、都市住民と農林漁家との強い心のつながりにより支えられ、都市住民に対する農林漁家のボランティア活動」と述べられたことです。これは、試験的な体験に参加されて以来、何度も来島されている高齢の参加者が、「私たちのほう

が生きがいとして得るものが多い。今の時代に一番求められている新たな社会運動になり得る」と言われたことに一致しています。

ワカメ漁家の方は、「手伝ってもらえるのはありがたいけど、申し訳なく」と受け入れを躊躇されていますが、それは逆。むしろ、離島の漁家による都市住民へのボランティア活動なのです。「結（ゆい）づくり」は必ず拡大していく、そう私は信じています。